

氏名（本籍）	おかだ しほ 岡田 志保（広島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 144 号
学位授与年月日	2021 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	福田平八郎作《漣》における「写実を基本にした装飾画」の意味
論文審査委員	主 査 教授 藁 谷 実 副 査 准教授 城 市 真理子 副 査 准教授 前 田 力 副 査 准教授 石 松 紀 子

論文内容の要旨

本論文の題目に含まれる「写実を基本にした装飾画」とは、福田平八郎が自己の制作について説明した言葉である。この言葉は平八郎の作品を端的に説明する、作家本人による説得力の持つ言葉として、画業や作品の解説で頻繁に引き合いに出され、平八郎研究もこの言葉を手掛かりに行われることが多い。

しかし、「写実」と「装飾」による制作を試みていたのは平八郎だけではない。例えば、菱田春草や岸田劉生も「写実」と「装飾」について思索を行い、それを造形表現とすることに挑戦している。装飾的であるといわれる日本の美術を遡ってみても、そこには「写実」とのせめぎ合いが存在していた。俵屋宗達の造形には装飾性の中にもリアルが込められ、土佐派の観念的造形は視覚的快楽だけでなく、鑑賞者の情感を刺激し、実感を想起させる。円山応挙は表現は写実的でありながらも、観念的イメージを巧みに利用し、現実と幻想のあわいの世界を出現させる。平八郎と同時代の作家も「写実」と「装飾」を意識していた作家は少なくなく、日本画家だけでなく、洋画家もこうした問題意識を持っていた。しかし、こうした作家らの「写実」と「装飾」の造形は一様ではない。それはつまり、作家それぞれの「写実」と「装飾」に対する見解が異なっていたことを示す。そのため「写実」と「装飾」という言葉だけでは、作家の制作を理解したことにはならず、個別に検証する必要がある。そのため、本論では平八郎の画業の理解のために「写実」と「装飾」の意味を明らかにすることを目的とする。

考察を行うにあたり福田平八郎作《漣》を軸とする。《漣》はその大胆な表現によって当時の日本画壇に一石を投じた作品である。微風によって起こる漣を、銀地に群青の線描のみで描いた表現は、抽象的でモダンな表現であると評価される一方で、自然を真に

捉えた写実的な作品であるという評価も存在する。多くの先行研究がこの作品を平八郎の画業における分水嶺とみなすように、この作品を境に平八郎の作風は、平八郎の述べるいわゆる「写実を基本にした装飾画」へ向かう。そのため、平八郎が「写実」と「装飾」に何らかの確信の見解を持ったのがこの《漣》においてであったと考えられる。従って本論は《漣》を論点の中央に据えて、平八郎の作品の変遷、作家の言葉、周辺人物の証言から、大正時代から昭和初期にかけての時代の動向がどのように関与していたかを考察することで、「写実を基本にした装飾画」の意味を明らかとしていく。

第1章では、平八郎の画業の節々で方向を規定していた、京都的傾向に通じる平八郎の元来の性質について述べる。第2章では、平八郎が「写実」を生涯の指針とするに至る経緯を述べていく。第3章では、平八郎だけでなく多くの作家が写実を試みていたが、この写実の動向の時代背景について明らかとすることで平八郎における「写実」の意義の考察につなげる。第4章では、平八郎の制作に装飾的なものが入り込んでくるきっかけが、宋元画を研究したことにあるのではないかという考察を行う。第5章では、平八郎は「装飾」という観点から桃山美術や琳派に参照とする対象を広げ、当時そこで語られていた「装飾」についての思想に感化されたことで、緻密な写実から脱して、大胆な表現に踏み切っていたのではないかという考察を行う。

第6章から第7章にかけては、第5章で確認した装飾観に加えて、平八郎の画風を完成させるきっかけとなっていたものとして考えられる“主観による「写実」”を軸に考察を行う。まず第6章では、平八郎に“主観による「写実」”の観念を持つに至らしめたと考えられる六潮会の洋画家達を取り巻いていた洋画界の動向について述べることで“主観による「写実」”がどういった観念であったのかを示していく。そして第7章では、平八郎は六潮会の洋画家達のどのような思想に導かれて“主観による「写実」”を持つに至ったのかを考察していく。また、“主観による「写実」”は平八郎に作家としての主体性を確立することにも貢献していたと考えられ、それを「写真」の表現との関係から明らかとする。

最終的な結論として、平八郎が時代の思潮に影響を受けながら形成された装飾観と“主観による写実”が表現造形として一体となり、自然の実相に直截であればおのずと表現は「写実」と「装飾」を兼ね揃えるという発想に至ったことで、自由な自己の主体性が確立され、それが実践されたものが《漣》であったのではないかということ述べる。以上のような考察によって平八郎の「写実を基本にした装飾画」の意味を明らかとする。

論文審査の結果の要旨

論文 福田平八郎作《漣》における「写実を基本にした装飾画」の意味及び研究作品「根の元」その他5点について本審査を行った。題目にある「写実を基本にした装飾画」は、福田平八郎自身の言葉である。昭和初期の福田平八郎作品《漣》に着目し、

平八郎作品の変遷を初期から《漣》に至るまでに影響を及ぼした芸術観を平八郎本人の言葉や先行研究、様々な関係資料を調べ解き明かした。当時の写実、装飾等の言葉について、現代の意味合いとずれがあることにも注視し、岡田自身の考察を交えながら結論を導き出した優れた論文である。

研究作品については、岡田は論文執筆以前より、自然の中に見られる規則性と乱れについて興味を持っており、それをテーマとした作品を制作している。提出された蓮やシダ類といった植物の中に見出した規則性と乱れの表現は、美しいリズムを生み、淡い色彩と調子が美しい秀作である。水中の養殖牡蠣や石垣など人の手が加わった対象にも同様の取り組みが成功している。それぞれの作品からは技法材料に対する優れた知識と技術が見て取れる。本審査では、溪流を描いた大作のデッサンを加え見応えのある作品群となった。以上のことから岡田志保の博士学位本審査結果を合格とした。